



聖歌の歌詞の世界

文学部長
日本学科 教授

田島 智子

令和 8 年 4 月から文学部長を拝命しております。日本古典文学が専門なものですから、「和の精神」の時間には、聖歌の言葉との出会いを楽しみにしています。皆さんも、はっとする表現に出会っていませんか。今回は「聖夜」（聖典聖歌集 33 頁）を取り上げてみます。

星の夜空の美しさ 誰かは知るや天のなぞ

無数の瞳輝けば 歓喜になごむ我が心

ガンジス河の真砂より あまたおわする仏たち

夜昼常に護らすと 聞くになごめる我が心

作詞の九條武子（明治 20 年 - 昭和 3 年）は、浄土真宗本願寺派に生まれたお嬢様です。仏教をよく理解し、歌人でもありました。

柳原白蓮らとともに大正三美人として有名で、写真で見るとたおやかな麗人です。

この歌のテーマは、『大無量寿経』の「十方恒沙の諸仏如来」という教えです。大宇宙（十方）にはガンジス河の砂（恒沙）のように無数の仏がいっしょになって私たちを見守っているということです。満天の星空を見た経験を思い出してください。宇宙の広大さに圧倒され、自分のちっぽけさが身に沁みますが、次第に、大きなものに包まれているという気持ちになったのではないのでしょうか。それを思い起こすと、よく理解できる歌詞です。

ただ、傍線部「なごむ」は注目したい言葉です。現在「なごむ」は、たとえば「かわいい子猫になごむ」のように、癒されてほっこりした時に使います。しかし、古くはそうではありませんでした。「荒ぶる神のなごむなりけり」（為忠家初度百首）、「さて腹立ちなむ。なほなごめさせおはしませ。」（落窪物語）のように、荒々しい状態・腹を立てている状態が穏やかになることを言いました。荒れた海が穏やかになる「風（なぎ）」と関係する言葉です。たおやかな九條武子も、荒れ狂う感情を胸に星空を見上げ、心落ち着かせたことがあったかと思うと、親近感がわきます。皆さんもぜひ、怒りにとらわれた時、この歌を思い出してください。



次の一歩のために ー短期大学部保育科のこれからー

短期大学部長
保育科 教授

伊達 由実

短期大学部保育科は昭和 42 年に四天王寺女子短期大学保育科として設置されて以来、多くの保育者を社会に送り出してきました。大阪だけでなく、奈良や和歌山での実習訪問時に、園長先生や主任の先生から「私も四天王寺保育科の卒業生です」とお声をかけていただくことがたびたびあります。私は平成 18 年度に短大保育科に配属されましたが、その翌年に当時の学科長のもとで大きなカリキュラム改訂を行いました。このとき改訂の目玉となったのが現在も継続して取り組んでいる「保育実践演習」という授業でした。1・2 年生の学生全員と全教員が共に学ぶ科目として設置する準備を進めましたが、初めての取り組みで様々な困難に直面して苦労の連続でした。

当時私たちは二つのことを考えて教育にあたっていました。一つは「学生と教員が共に汗をかく学科になろう」ということでした。もう一つは「同僚性を大事にする教員集団になろう」ということでした。ここでいう同僚とは「単に職を共にしているものではなく、いつも、同僚の仕事に対して自分に助けられることはないかという思いでそこにいるという心の構えだ」と私たちは理解

していました。太鼓やキーボード、竹竿などをもって電車に乗って学生と一緒に近隣の保育施設に出掛けた「出前保育」では、初めての緊張もあってか大学に帰った時には学生も教員もぐったり疲れてはいましたが、同時に充実した達成感を味わってしまいました。

「出前保育」に限らず「保育実践演習」での様々な取り組みは、これら二つのことを形にするための良い畑であったと思います。そして、今思えば、この頃の苦労が現在の保育科の基礎を形作ったといえるかもしれません。

ただ、科目設置から 20 年が経とうとしています。社会の変化に伴って保育や保育者養成を取り巻く環境も大きく変化してきました。保育者を目指す子どもが減少していることを実感しています。国の就学支援が充実した結果なのか、短期大学への逆風が吹いています。この間、文部科学省や厚生労働省の定めたカリキュラム改訂を実施するだけでなく、「保育探究演習」という新しい独自科目を立ち上げて、社会から求められる人材の育成に努めてきましたが、十分ではないようです。60 年近く継続してきた短期大学部としての保育者養成の灯を絶やさないために、新しい一歩が必要になっていることを強く感じています。

幸い本年度、地域と本学の保育者養成をつなぐ試みとして「保育実践センター」が立ち上がりました。4 年制の教育学部教育学科幼児教育保育コースとの協力の機運も高まっています。三者で手を携えて「保育者養成の四天王寺」を確立するという新しい試みのスタート地点に立った今、私はやはり 20 年前に掲げた二つのこと - 「学生とともに汗をかく」「同僚性を大事にした教員集団となる」 - を大事にしていきたいと思っています。事務職員も含めた同僚とともに、社会や時代の要請に応える保育者養成を確立する努力を継続していきたいと考えています。

学校法人四天王寺学園
常務理事

坂本 峰徳



私たちは「正しさ」に疲れていないでしょうか？

大学という場所は、論理的に思考し、何が「正しいか」を追求する空間です。学問において、私たちは言葉を研ぎ澄まし、社会の課題や人間の心理、歴史の是非について日々議論を戦わしています。より良い社会、より倫理的な生き方を模索する上で、「正しさ」を求める姿勢は極めて重要です。

しかし、一步大学の門を出て現代社会を見渡したとき、私たちはある種の息苦しさを感じてはいないでしょうか。インターネットやSNSを開けば、誰かの失言や過去の過ちが瞬時に拡散され、激しい言葉で糾弾される光景が日常茶飯事となっています。一度の失敗も認めない。そんな「絶対に間違えてはならない社会」の空気は、私たちの心をじわじわと締め付けています。

正論は強力です。誰も反論できないからこそ、時にそれは刃となって特定の個人を追い詰めます。しかし、私たちが日々学ぶ文学、歴史、哲学などが教えてくれるのは、本当にそのような「完璧な正しさ」の押し付け合いだったのでしょうか。ここで一度立ち止まり、私たちがこれからの社会を生きていく上で、正しさと同じくらい必要な知性について考えてみてほしいのです。それこそが、「許し、許されること」の本質を理解する力です。

仏教が教える「因縁」：誰もが過ちを犯す条件を抱えている

「許す」という行為を考える上で、仏教の視点は大きなヒントを与えます。仏教には「因縁（いんねん）」という考え方があります。すべての物事や人の行動は、それ単体で起きるのではなく、原因（因）と、それを囲む環境やタイミング（縁）が結びついて生まれる、という思想です。

私たちは、誰かが過ちを犯したとき「その人の人間性に問題がある」と個人を責めがちです。しかし仏教の視点に立てば、間違えた人と私たちの間に、本質的な違いはありません。

たまたまその人が、過ちを犯さざるを得ないような、精神的な追い詰められ方や環境（縁）に出会ってしまったに過ぎないのです。「もし自分が全く同じ環境、同じ時代、同じプレッシャーの中に置かれていたら、絶対にその過ちを犯さなかったと言い切れるだろうか」。そう自分に問いかけることが求められます。

仏教が教えるのは、人間を「正しい者」と「悪人」に二分する冷徹さではありません。人間は誰もが、環境次第でいつでも弱くなり、間違えてしまう存在なのだという、慈悲に満ちた諦念（あきらめと見極め）です。この視点を持つとき、私たちは他者をただ糾弾するのではなく、「過ちの背景」に想像力を働かせる一歩を踏み出せます。

聖徳太子が説いた「共に凡夫である」という寛容

この仏教の精神を、日本の政治や倫理の土台として見事に提示したのが、聖徳太子です。太子が定めた『十七条憲法』の第十条

には、現代の不寛容な社会に生きる私たちが、耳を傾けるべき言葉が記されています。

「怒りを絶ち、瞋りを棄て、人の違を怒らざれ

人皆（ひとみな）心あり、心各々執るところあり。彼の是は則ち我の非にして、我の是は則ち彼の非なり。我必ず聖に非ず、彼必ず愚に非ず。共に是れ凡夫のみ」

大意はこうです。「心の中の怒りを断ち、顔に出る怒りを捨て、自分と意見が違う人を怒ってはならない。人にはそれぞれの心があり、それぞれのこだわりがある。相手が正しいと思うことを自分は間違っていると思い、自分が正しいと思うことを相手は間違っていると言う。しかし、自分が絶対に聖人（完璧な存在）になわけても、相手が絶対に愚かなわけでもない。私たちはお互いに、不完全な人間（凡夫）なのだから」。

千四百年以上前、国家の基盤を作ろうとしていた聖徳太子が最も恐れたのは、他者の過ちや違いを許さず、自分の正しさだけを主張して対立する「分断」でした。お互いが不完全な存在であると認めること。それこそが、他者を「許し」、同時に自分もまた「許される」ための前提条件なのです。

「許し」とは、自分を過去から解放する主体的決断

「許す」とは、相手の行為を100%肯定することでも、過ちを「なかったこと」にして水に流すことでもありません。特に理不尽に傷つけられた場合、怒りを覚えるのは当然です。

しかし、仏教に依ると「許す」とは「相手に対する怒りや憎しみという執着から、自分自身を解放すること」につながるのです。誰かを恨み続けるとき、私たちの心と時間はその「過去の出来事」に縛り付けられています。エネルギーのすべてが、自分を傷つけた相手のために消費されてしまうのです。「許す」とは、相手のために寛大になることでは必ずしもありません。これ以上自分の人生の主導権を相手に渡さないために、自らの意思で怒りの手放しを選択する、極めて主体的で知的な決断なのです。

また、社会的な視点から見れば、一度の間違ひも許されない「やり直しのきかない社会」は極めて脆弱です。人間が自らの責任を自覚し、成長するためには、過ちを認めた後に「もう一度やり直してもいい」という社会や身近な他者からの「許し」のサインが必要です。皆さんもこれまでの人生で、誰かに自分の未熟さをそっと目をつぶってもらい、許された経験があるはずで。その時、救われた気持ちと同時に「次はもっと良く生きよう」と思わなかったでしょうか。その循環を止めてはならないのです。

他者と自分を許す「心の余白」を持つ

私たちは今、正しさが鋭利な武器として使われる、少し窮屈な時代を生きています。だからこそ、言葉や人間を学ぶ皆さんには、社会の不寛容さに流されないでほしいのです。

他者の不完全さを認め、その背景にある因縁に想像力を働かせること。そして同時に、完璧ではない自分自身の弱さもまた、受け入れ、許してあげること。自分を許すことができない人は、他者を許すこともできません。まずは自分自身の心に、失敗してもいい、間違えてもいいという「余白」を作っていただきたいと思います。

将来、大学を巣立ち、これからの複雑で不確実な社会へと歩みを進めるとき、論理的な正しさだけでなく、他者を包み込む「許しの知性」を携えていってくれることを願っています。

「ウパーヤ」学生編集員募集！！

本学の仏教教育広報誌「ウパーヤ」の紙面作りに参加していただける学生編集員を募集しています。仏教、寺院、仏像、巡礼、歴史、日本文化などに興味のある方、また取材や記事の執筆に関心のある方ならどなたでも歓迎します。学部学科専攻も問いません。

これまで第4面の「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」の取材記事の執筆、およびその取材見学の様子をホームページに掲

載するなどの活動をしてきました。また、本学が仏教教育の一環として実施していた座禅会に参加し、その実施状況をレポートしていただいたこともあります。

興味のある方、詳しい話を聞きたいという方は、第4面下に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究員にお声を掛けてください。

ご連絡お待ちしております。

(杉中 康平)



頂法寺（六角堂）

第29回卒業生インタビュー

話し手：福本 真帆（ふくもと まほ） 日本生命保険相互会社カスタマーサービスオフィス近畿 CS 第2 オフィス勤務
（令和2年3月 人文社会学部社会学科卒業）
聞き手：中村 洋樹（仏教文化研究所研究員 社会学部社会学科講師、本編編集）



仕事について

私は現在、日本生命保険相互会社カスタマーサービスオフィス近畿 CS 第2 オフィスでサービスコーディネーターとして勤務しています。保険営業の仕事のため、営業成績が伸びることにやりがいがあると思われがちですが、私は保険金をお支払いするときにやりがいを感じています。保険金をお支払いするとき、お客様はご病気になられたり、お怪我をされたりといった状況のため、大変不安を感じておられます。また、ご病気やお怪我の治療費などの費用の心配をしなければならないことに加え、これまで通りにお仕事ができなくなったり、通院のためにお仕事を休まざるを得ない日が増えたりして収入が減るなどの不安も感じておられます。こうした不安をあらかじめ軽減するために我々は保険をお勧めしています。だからこそ、私は保険金のお支払いの際に、お客様から「言ってくれていたように保険に入っていてよかったわ、ありがとう」「お金の心配をせずに済んだよ」と言っていたいたときに、お役に立てて良かったと思うことが多く、やりがいを感じています。

「和の精神」について

私が学生だった頃は、「仏教Ⅰ・Ⅱ」という科目名でした。特に印象に残っているのは瞑想です。仏教の授業の際には、長い時間瞑想をすることができ、その結果、頭がクリアになりました。四天王寺大学に入学する前は、仏教や瞑想にはあまり関心がありませんでしたが、実際に瞑想に取り組むことで、特に呼吸の大事さを感じるようになりました。藤谷先生に、「呼吸を数えるようにしているんです」という話をしたら、「呼吸を数えられるようだったらすごいよ」と褒めていただいたこともあります。社会人になってからも、頭を切り替える必要があるときに、瞑想をするようにしています。いったんの区切りで瞑想をすることで呼吸が深くなり、リフレッシュにもなります。瞑想は四天王寺大学のような仏教系の大学でなければ出会えることはなかったでしょう。心や呼吸を整えたいときに、瞑想をすればよいという選択肢を持てたことは、たいへんありがたいことだと思っています。

余談になりますが、就職活動の面接時に、「いやなことがあったときに、どのようなマインドの切り替え方をしていますか」と質問され、そのときに私は「大学の授業で瞑想をする機会があり、1分程度でよいので取り入れるようにしています」と自信をもって答えました。

仏教の授業時には毎回講話の時間があり、自身の教養を深めることができました。講話のなかでも、瞑想や写経に取り組む意義を話していただいたことが印象に残っています。私が仏教の授業を受講していた頃は、当時の学長先生が、瞑想の体験は実生活に活きるものであるとお話されていました。当時の私は、瞑想を実生活に取り入れるという発想がなかったので、たいへん納得し、腑に落ちました。うやむやに瞑想や写経に取り組んでいても必ずしも自身の血肉にはならないでしょうから、当時の学長先生にいただいた講話はたいへん意味のあるものだったと思います。また、仏教の授業開始前に、当時司会をされていた奥羽先生が毎回二十四節気の話をしてくださったことも印象深いです。現代の我々が二十四節気の話に接するのはおそらく国語科

の授業ぐらいですが、毎回、「へえ～」と思いながら聞いていました。現代の若者の言葉で表現するならば「エモい」と感じる（ノスタルジーを感じる）時間であり、「すごくいいなあ」と思っていました。

「学園訓」について

学園訓のなかで一番大事だと思うのは、やはり「誠実を旨とせよ」です。仕事をしていても非常に大事だと思うのは「誠実かどうか」ということです。仕事は信頼関係で成り立っており、他者に対して誠実に向き合っていれば、困ったときにも助けてくれるものだと思います。色々な人と関わっていく上で、私自身の判断基準に、「この人は誠実かどうか」という軸が1本あるかもしれません。私の人生は「誠実を旨としている」と言っても過言ではありません。もちろん「礼儀を正しくせよ」も大事で、誠実につながるものだと思います。

「四恩に報いよ」の「四恩」のうち、「父母への恩」も大事だと思います。私の両親は、今の私の年齢のときにはすでに子供がいて持ち家もありました。当時と現在とは時代背景が異なるとはいえ尊敬の念を持っています。私の家族は、父、母、姉2人、そして私という構成のため、父は女性ばかりで大変だったと思います。それでも父は何の文句も言わずに働き、私たちを大学や専門学校にまで通わせてくれたことに感謝しています。仏教の授業では、聖歌を歌唱する時間がありましたが、私は「父母の歌」が好きでした。私にとっての父と母は、間違いなく歌詞にあるような存在です。

在学生へのアドバイス

月並みかもしれませんが、色々なことに挑戦してほしいと思います。今は、遠い未来のことを考えて、「もうちょっと経ったら、これができるようになるだろう」と思っているかもしれませんが、やりたいと思ったときに、やりたいことに挑戦してほしいです。社会人になると、仕事があるため、自分の時間をつくるのが難しくなります。年齢を重ねると役職に就いたりするなど責任も出てきます。そうすると、休みづらくなりますし、やりたいことが自由にできなくなります。大学生のうちだからこそ、何でもできることに感謝して、今を楽しんでほしいです。

もう一つ、色々な人と関わってほしいと思います。私が就職活動のときに困ったのは自己分析でした。自己を分析するためには他者と関わることが必要です。他者との関わりのおかげで自分のアイデンティティを形成することはできません。自分のことを知るためにも多くの人と関わってほしいです。私はPIATAの代表をしており、そのなかでは日頃接することのない他学部・他学科の先生方と関わる機会がありました。社会人になると、同じ業種の人と話す機会が圧倒的に多いですが、大学には様々な分野の先生方がおられ、ご自身の専門について日々研究されています。そのような環境は大学までしかなく、貴重な機会だと思います。ぜひ、学生同士だけでなく、先生方ともよく話をしてほしいと思います。

令和8年度夏学期「和の精神Ⅰ」講話一覧

4月9日	桃尾 幸順先生 藤谷 厚生先生	礼拝オリエンテーション（作法指導） 受講どころえ 一授業規律に関してーUPAYAについて	5月21日	成田 由岐子先生	学生生活とリスク社会について ～犯罪に巻き込まれない、起こさないために～
4月16日	須原 祥二学長 桃尾 幸順先生	和の精神で学ぶこと 授戒オリエンテーション	5月28日	仲谷 和記先生	薬物乱用の害について
4月23日	杉中 康平先生	和の精神を学ぶ意義 学修ポートフォリオの目標設定について	6月4日	西口 卓磨先生	「初心」と向き合うこと
	高松 直紀先生 東野 國子先生	「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業にふさわしい服装について	6月11日	坂本 峰徳常務理事	聖徳太子の教えと建学の精神
4月30日	桃尾 幸順先生	読経・瞑想 一心を整える楽しみー	6月18日	笠原 幸子先生 看護学部学生	2025年度 台湾高齢者研修の報告&OrangeProjectの紹介
5月7日	矢羽野 隆男先生	学園訓ー「和」についてー	6月25日	阪西 洋一先生 経営学部学生	和のこころとまちづくり
5月14日	中田 貴真先生	学園訓ー「礼儀」についてー	7月2日	塚原 昭人理事長	仏性を求めて 一常不輕菩薩から学ぶ人生へのエールー
			7月9日	杉中 康平先生 藤谷 厚生先生	学修ポートフォリオの記録について 夏学期授業の終講にあたり

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

— 聖徳太子とともに政治を推し進めた蘇我馬子の墓 ~石舞台古墳~ —

【石舞台古墳の場所】

奈良県明日香村に位置する石舞台古墳は、飛鳥時代を代表する遺跡として広く知られています。近鉄飛鳥駅から奈良交通の明日香周遊バスに乗り、約30分で石舞台古墳最寄りのバス停である「石舞台」に到着します。バス停からは徒歩3分ほどで古墳に着くことができ、初めて訪れる人でも迷うことなく向かえる便利な立地です。周辺は国営飛鳥歴史公園石舞台地区として整備されており、広々とした芝生や季節の花々が彩る遊歩道が広がっています。

観光客が古代の歴史に思いを馳せながら散策する姿が見られる一方、地域の人々にとっても憩いの場として親しまれています。石舞台古墳は、歴史遺産としての価値だけでなく、飛鳥の自然と調和した景観を楽しめる場所として、多くの人々に愛されています。

また、石舞台古墳周辺には古代の遺跡が多数点在しており、散策しながら飛鳥の歴史を立体的に感じられるのも魅力です。周遊バスのルート上には飛鳥寺や高松塚古墳などの名所も含まれており、石舞台古墳を中心に歴史散策を楽しむ人も多く見られます。

【石舞台古墳の概要】

石舞台古墳は、昭和8年と昭和10年に発掘調査が行われ、その構造や規模が明らかになりました。もともとは方墳であったと考えられていますが、現在は盛土が失われ、巨大な石室が露出した独特の姿を見せています。埋葬施設は横穴式石室で、上流部から運んできた、総重量約2300トンともいわれる巨石が積み上げられた壮大な構造を持ちます。天井石だけでも約77トンに及びます。過去に大きな地震を経験していますが、崩れることがなく、姿を保ち続けていることから、古代の人々が持っていた技術力や組織力の高さを知ることができます。立地や築造時期から被葬者は本年で没後1400年をむかえる蘇我馬子と考えられています。

また、昭和50年代の調査では、外堤西側の下層から7基の横穴式石室を持つ古墳が発見されました。このことから、石舞台古墳はそれ以前にあった7つの小規模古墳を壊して築かれたものと考えられます。被葬者と考えられている蘇我馬子の権威の大きさが垣間見えます。

【蘇我馬子と聖徳太子の政治】

蘇我馬子は飛鳥時代を代表する政治家であり、推古天皇のもとで聖徳太子とともに国家体制の整備を推し進めた人物として知られています。蘇我馬子や聖徳太子らは遣隋使を通じて、当時の先進国家であった隋の制度や文化を積極的に取り入れました。これにより、日本の政

治制度や文化は大きく発展し、中央集権化への基盤が築かれることとなりました。また、冠位十二階の制定によって能力に基づく官僚制度の基礎を築き、身分にとらわれない人材登用の理念を示しました。さらに、憲法十七条の制定では、政治倫理や官人の心得を示すことで、国家運営の理念を明確にしました。

こうした改革の背景には、国内の豪族間の対立や、外来文化の流入による社会変化がありました。蘇我馬子と聖徳太子は、複雑な政治状況の中で新しい国家像を模索し、制度の整備を通じて安定した政治体制の構築を目指しました。その結果、飛鳥時代は日本史の中でも特に大きな変革期となり、後の律令国家成立へとつながっていきます。

また、蘇我馬子は仏教の受容にも深く関わり、寺院の建立を推進するなど、宗教政策の面でも大きな影響を与えました。仏教を国家の安定に役立つ思想として位置づけたことは、後の日本文化に長く影響を残す重要な決断であり、聖徳太子との協力関係を語る上でも欠かせない要素です。

【石舞台古墳と世界遺産「飛鳥・藤原の宮都」】

令和8年7月には、「飛鳥・藤原の宮都」が世界遺産に登録されました。飛鳥時代、日本の政治・文化の中心であったこの地域は、国家形成の重要な舞台として世界的に評価されています。石舞台古墳もその構成資産の一つとして位置づけられ、飛鳥の歴史を象徴する遺跡として注目を集めています。特に、蘇我馬子の墓とされる石舞台古墳が、馬子の没後1400年という節目の年に世界遺産として登録されたことは象徴的であり、彼が果たした歴史的役割について、改めて認識されるきっかけになったとも言えます。世界遺産登録後は国内外からの注目がさらに高まり、石舞台古墳を訪れる観光客も増加しています。地域ではガイドツアーや展示の充実が進められ、飛鳥の歴史をより深く学べる環境が整いつつあります。こうした動きは、古代史の魅力が次世代へ伝わる大きな力となり、地域全体の文化振興にもつながっています。

さらに、世界遺産としての評価は、地域の保存活動にも大きな追い風となっています。石舞台古墳を含む飛鳥地域では、景観保全や史跡の維持管理がより一層重視されるようになり、地域住民と行政が協力して歴史資源を守る取り組みが進められています。

これからは、行政と地域住民、そして来訪者がそれぞれの立場から力を合わせ、石舞台古墳をはじめとした歴史遺産を未来へ守り伝えていく機運を高めていくことが重要となってくるでしょう。

(星野拓海、八木雅矢)

仏教のことば

—— 平常心 ——

「平常心」（へいじょうしん）ということばは、試験やスポーツ競技等において、落ち着いた気持ちで、普段通り・練習通りのパフォーマンスを発揮するために重要な心構えを表す表現として一般に用いられていますが、その語源は禅語の「平常心是道」（びょうじょうしんこれどう）にあるとも言われています。

この禅語での「平常心」（びょうじょうしん）ですが、「平生・日常」（普段と変わらない・いつも通り）の「心」が、仏道である（「是道」（これどう））と続きます。仏道における悟りは、特別な場所や環境での修行によらずとも、日常生活における自らの心の中にこそあるということが

説かれています。

「平常心是道」は、「即心是仏」（じくしんぜふ）（詳しくは「無門関」『碧巖録』等を参照）などとともに、茶掛の禅語としてよく知られています。千利休のことばに「小座敷の茶の湯は、第一仏法を以て、修行得道する事なり。…水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたてて、仏にそなへ人にもほどこし、吾ものむ。花をたて香をたく。みなみな仏祖の行ひのあとを学ぶなり。『南方録』」とあるように、茶道において常に心に留めておくべき心構えです。茶道では、所作や点前に型がありますが、正しく実践し続けることで自然と心が整っていくのが感じられます。

UPÅYA 第27号で理事長が「仏性」について書かれていました。学生のみなさんは、「和の精神」の授業での献灯・読経・聖歌・講話を通して学修を深め、和の心・利他の精神に基づき、日頃から学園訓を実践されていることと思います。「道心の中に衣食あり」と伝教大師最澄のことばにあります。ご縁に感謝しつつ、目の前のことに丁寧に向き合うことを大切にしたいと、気持ちを新たにしました。

(中田 真貴)

編集後記

今号では、巻頭エッセイとして文学部長の田島 智子先生からは「聖歌の歌詞の世界」について、短期大学部長の伊達 由美先生からは「次の一歩のために—短期大学部保育科のこれから—」について、また、第2面では常務理事の坂本 峰徳先生から「現代に活かす和の精神—十七条憲法 十に曰く、怒りを絶ち、瞋りを棄て、人の違うを怒らざれ」についてご執筆いただきました。どのお話も私たちの日々の在り方や生き方に示唆を与えてくださる貴重な内容となっています。第3面の卒業生インタビューでは、生命保険会社での仕事で活躍の福本 真帆さんより、和の精神の授業や学園訓のお話を交えつつ、学生時代を振り返りながら、本学で学ぶ後輩学生への貴重なアドバイスを語っていただきました。第4面では、世界遺産にも選ばれた石舞台古墳について学生編集委員の星野 拓海さん、八木 雅矢さんが紹介してくれました。一度明日香村を訪れてみてはいかがでしょうか。次号もご期待ください。

(上續 宏道)

研究所員紹介

所 長 藤谷 厚生(教授)

主 任 杉中 康平(教授)

研究員

上 瀬 宏道(教授) 神野 雅代(教授)

矢野 隆男(教授) 中田 真貴(准教授)

吉田 祐一郎(准教授) 李 美子(准教授)

中村 洋樹(専任講師) 西口 卓磨(専任講師)

客員研究員 桃尾 幸順

(職位・五十音順)

UPÅYA(ウパーヤ) 29号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

令和8年9月1日発行

発行 四天王寺大学

仏教文化研究所 仏教教育センター

所在地 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1

TEL:072-956-3181(代)

URL:https://www.shitennoji.ac.jp/

「UPÅYA(ウパーヤ)」に関する
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。

E-mail bukken@shitennoji.ac.jp

(件名は「ウパーヤ」としてください)

